

特252
527

田中智學述

精神的生命線

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5

始



特252
527



精神的生命線

田中智學述



海洲の日本に於て

大なり。其れが

横の龍の國なり。

中一ノモリナリ

叙 例

本篇ハ予ガ豫テ懷ケル滿洲觀ヲ、今回渡滿ノ上、親シク見聞感知シタル所ト併セテ、イヨ／＼所觀ノ誤ラザルヲ確カメ得タルニ由リ、一冊子ト爲シテ之ヲ滿洲朝野ノ日滿兩國關係者ニ贈リテ、眞ニ王道開發ノ實ヲ舉ゲラレンコトヲ熱願スルニ付、二三ノ字句ヲ修正セル所ナリ。願クハ本篇一覽ノ諸賢、予ノ衷情ノ在ル所ヲ察シ、經營施設ニ最眞最善ヲ發揮シタマハンコトヲ、予在滿旅中、六月二十九日ヲ以テ、畏クモ 皇帝陛下へ日本國體王道ノ本義十則ヲ進講シ奉リタル光榮ヲ在懷シテ、感激一層深キヲ覺ユ、献芹ノ微誠、汎ク本篇ノ小鼓吹ヲ以テ、王化徹底ノ萬一ニ資シ奉ル所ナリ。

昭和十年九月

田 中 智 學

庚 記

精神的生命線

田 中 智 學

(一)

滿洲に對する予の考察宿望は、滿洲事變突發の時から涌出して、胸中に鬱勃として適當の機會にそれを演暢したいと思つて居た、今度の滿洲行は其時が來たのかも知れないと思つて此機會に所懐の一端を述べて見る。

併し内地に居て考へた事と、實地を見た上の考とは、多少の進退はあるだらうが、其中心とする所は初めから一貫して居る。即ち今滿洲觀に燃えて居る胸の中から、ポツ／＼と述べて見るが、それに就て先づ滿洲を日本の精神的生命線とする事を豫告して置く、普通にいふ權益の生命線としての觀察は、必ずしも予が論議する限りでない。只予はわが國體觀に基いた所信を率直に披瀝するばかりである。

物事は總て現實に即せざれば理論も觀念も詮はない。さればとて現實のみを逐て、肝心の根本方針が空疎では、只紛雜多岐に惱んでおしまひになるの虞れがあらう。理に會し事に融して始めて要を得るのであるから、此點尤も留意すべき所である。即ち予の所觀所論は一切此原則の上に立つ事を斷つて置く。

(一)

滿洲國が新に獨立したといふ「新らしさ」は、たゞの新らしさではない、事物展開の原則に依て生れ出たのであるから、これは天授の新らしさである。故に此創新を以て「出來星の新らしさ」と思つてはならない。其内面に包藏する意義と閱歷とは、太古に直通する力の累積が籠つて居る。即ち近くは清朝歴代君臣の努力、遠くは古聖先王の啓發指導が土台となつて潜在して居る、そこへこれを扶ける大いなる力が加はり、世界動向の機運に乗じて産み出した大陣痛の犠牲がある、それは何か、明治天皇の遠大な雄謀たる、世界平和東洋保全の大慈大勇大智のそれである。日滿兩國の連結は主因は懸つて斯にある。

是を等閑に附して滿洲を經綸することは出來ない筈だ。それから又滿洲は孔子を忘れてはならぬ、堯舜を忘れてはならぬ。それと同時に將たそれよりも深重な意味に於て明治天皇を忘れてはならぬ。近い力で而かも遠い淵源を實證し得るものは、獨り活ける堯舜としての 明治天皇である。

(三)

大東文化の普遍性は、民族的には老子、國家的には孔子、其源は堯舜で、其道義構成は王道文化に極まる、よくこれを説明したものは獨り文宣王孔夫子で、所謂堯舜を祖述した先覺者である。然るにその現實の堯舜は、「書經」「魯論」の文字からぬけ出して金色燦爛の光りを全世界に放射したものはたゞ大日本の皇統であつて、其意思言行が結晶して日本國體の大道義となつて居る、即ち活た堯舜である。今に世界中もだが、先以て大東文化に向てこれを入眼すべきである。中華民國、滿洲、日本、此三國結合が現代の最大必要で、其仕事始めが滿洲の獨立と發展とである。即ち滿洲の天任は此意味に於て甚だ重大である。即ち滿洲の確立と進展如何は世界の目安であるから、尤も慎み且つ振はねばならぬ。抑も世界の眞の安定は、必ず日本を正しく理解し、且つこれと揆を一にすることに依てのみ築き上げらるべしとは、日本建國の宣言に昭々た

る所で、即ち満洲の建國は之を現代に再寫したものである。

(四)

孔子の道は儒教となつて傳はつて居る、併し其教蹟の振はざる事、支那日本共に現代より甚しきはなからう、それは言教の花が咲亂れて實を結ばなかつた故である。今日に於て急に思出したやうに、「子曰く」をやり出しても恐らく効果はあがるまい。孔子の教を生で示して、現實の満洲を直感させるのは、「日本國體」の大道より外にない。國體の活證文は、明治天皇の聖德鴻業の外にはあるまい。其偉大なる顯迹は最も強く晰かに満洲の地に印し出されてある。幾億の財、幾十萬の生血、それは悉く、明治天皇の御身代りである。それで出来上つた満洲帝國だと知つたら、此大犠牲を犬死させではならぬ筈である。満洲の出来た力の元は日露戦役の犠牲だとは、誰れも知り誰れも言ふ所だが、その犠牲の無限力無窮性を突止めて、正しい意味で其大効果を活かさねばならぬ。物好で戦つたのではない。一筋に道の爲め世の爲めにした大道義の發動である、此點から其所因を洞觀してかゝらぬと、王道の光は出ない。

(五)

予は世界列國に向つて、本當の國家といふもの、見本にすべく満洲を直視するがいと勸告する。今の世界の國々は満洲を承認するのせぬのと云へた義理ではない、列國の現状を反省して見ればわかる、あの態は何だ。畢竟正式に國家が出来て居ないからである、國家といふものは國々互に相睦み合つて民人の安定をかたくするのが目的である、それが出来なければ國家は落第だ。注文通りの國家にしたければ、どの國でも王道政治に依る外に途はない、其見本が満洲だ。此意味から見て、満洲を承認するしないよりも、満洲から承認されるやうにするのが本筋だ。故に満洲帝國は世界列國に對する試験官である。トすれば、試験される無國體の國家に對し、率先して王道の見本を示す役目が満洲に在ること論を待たない。その満洲と提携して満洲を男にする様に世話をやく日本は、一層率先して王道實義の原本たる「國體」を體達して居らねば、満洲を指導する事が出来ないではないか、此點から見ても日本の國體明徴は方しく秋だ。

(六)

是からの世界は、左の三つの動きで、どうにもなる運命となつて來た。

一 寂かなるべきもの……それは日本

二 働くべきもの……………それは満洲

三 目覚むべきもの……………それは列國

此三つの責任は、天が課した人類文化進展のプログラムである。

此中で一番大事な役は、何と言っても日本の態度だ。今日日本は静寂を命とすべき天命の運に立て居る、「徐かなる、こと林の如し」の場だ。静寂は深慮から来る、多く考へても正しく判断しなければダメだ。餘りに躁急繁雜に中られてはならぬ。先づ諸の愚論邪論曲論偏論を放擲して、専念集注して一境に關心すべきである。一境とは國體の精要を研鑽する此一事である。日本の近代は餘りに理窟が多すぎる、用のない又は遠い小理窟を、外國から仕入れて来て、身動きもならぬほどに紛了されて居る、宜しくこの苦い經驗から反省して、内は日本のため外は満洲のため、一度立直った日本になる必要がある。ウブな満洲に、ハイカラ病を傳染させることは、フル／＼禁物である。

(七)

日本は寂かに、満洲は働き、世界は目覚める、是れ現在處すべき各々の運命である。先づ第一に熟慮すべきことは、日本の「寂かに」といふ事であらう。實のところ一番

忙しい筈の日本であらうのに、何故寂かにといふのか、話しは乃點だ。日本の役目は直接には満洲を指導し、間接には世界を覺醒させる役廻りであるから、目のまはるほど忙しいわけだが、此場合奔命に疲れる様なことになつてはならぬ、忙しければ忙しいほど、落着て考慮を練るのが何より肝心である。非常時は相手の方のことだ、非常の場合には「常」の對策が要る。「常」とは寂かといふ事だ、常は動かないこと「寂」は騒がないこと、そこに闇を破る「光」がある。この常觀寂想から放つ光でなければ、事物の處置は出來ない。満洲の啓發なり世界への指導なりは言ふに及ばず、お膝元の内治さへも、落着きを失つた騒がしい頭では、何事もまとまツた考へが出るものでない、今の日本の最要誼は是だ。

(八)

忙しい日本に静寂を課することは、その忙しさを整理して意義あらしめ、又力あらしむるに缺くべからざる最要事である。落着いたものでなければ好い分別も出ないし、イザとなつて氣の利いた働きの出來るものでないことは、多くの辭書を引いて見ずとも解りきつたことであらう。日本の今日は此用意が特に必要である。政府も落付かね

ばならぬ、政治家も學者も思想家も、その力量を彰はす前、必ず一段の靜寂境を通過すべきである。現代日本の缺陷は、理窟よりも施設よりも、先づ靜思熟慮を缺いて居ることが、何よりの禍ひである。さればとて、何等目的も標準もなく、空漠と寂かて居れといふのではない。一つの目安に集中して、一端靜寂裡に思ひを整へ想を鍛鍊して、發するや疾風迅雷の如く、臨むや天日の萬物を照すが如く、明かに強く正しく周匝に其主張を徹底し、其抱負を實現するに於て、萬遺漏なきを期すべき用意を整へよといふのである。「徐かなること林の如く」、「動かざること山の如く」にして、その發するに當りて「疾きこと風の如く」、「侵掠すること火の如き」成功を得るのである。

(九)

畢竟西洋なり支那なりが、日本の戦さに強いのを見て、早計にも「好戰國」と誤認したのは、日本軍が正義行動なることを理解しない爲めではあるが、その背後のわが政治考索に於て、靜寂さを失つた爲め、思ひもかけざる誤解や行惱みを生じた例しは古今乏しくない。別して戦後の收拾策に於て此憾みが多々あるのは残念である。獨り爲政者ばかりではない、一般國民に此落着がないところから招いた損害は、數多くある中に著しい實例は、馬關媾和談判中に起つた李鴻章狙撃事件などが其である。昔し北條時宗が蒙古の使者を斬つたのも、津田三造の天津刃傷も皆兄弟分の躁狂病である。この寂かさを缺く原因は、畢竟何から來たかを案じて見ると、根本唯一つ國體の眞意を熟慮深解して、然る後國家經綸に踏出すことを忘れたからである。萬事は國體精神の健養が本だ、寂かに思ひを此に致して國體心を堅固に把住し、神武創業の大國是を理解し體達してからの事だ。此靜思に就て大寂が必要なのである。

(十)

國體といふことは寂かに考へねば解らぬほどむづかしいものかといふに、考へ様によつては少しもむづかしい事はない。日本人が日本の國體を考へることは、農夫が田畠を辨別し、漁家が魚介を知り分けるほどのものであるから、是ほど研究し易く且つおのれに親しいものは無い筈であるのに、どういふものか、國を擧げて知らずとも可い餘計な事には、相當心力を盡して居るにも關らず、國體の事といふと對岸の火事ほどにも思はない。むしろ餘計な事かのやうに考へて、冷々淡々どこを風が吹くかといふ様に繼子扱ひをして平氣で居る。かとおもふと、偶ま國體がどうかうと言ふものも、淺

薄にして眞を失うか、然らざれば偏狹固陋の邊見て、世人に正しい理解を與ふることなく、時には嫌氣のさす様な自尊排他的のものもあつて、國體の名はあつても其眞相を知るに由なく、明徴の唱へはあつても其方針が判然して居ないから、今に於て完全に國體を明徴にするに就ては、尙以て何よりも靜思一番して眞劍になることが先だ。

(十一)

「樹靜かならんとすれども風之を騒がし、月明かならんとすれども雲、これを翳す」と言つた様な工合で、今の日本の現状は、いろくゝの點で正念精思を妨げることが多い。殊に國體の正義を正解しようといふ精神準備を有して居らぬところから、何か餘計な事の様思ひ做して居る不所存ものもあり、甚しきは國體などいふと舊思想の如く考へたり、自由主義に背叛するかの如く早合點するものが多い。何よりも開捨ならざる事は、國體思想を以て右傾思想とか右翼主義とか言ひ僻めて居る一事は、以ての外の妄推臆斷である。元來右傾の左傾のといふ事は既に眞理正準を脱線した畸形思想である。國體は既に名の示す如く、「國の本體」である。體の本來は中心の通り立つもので、傾く筈のものでない、即ち中正公明情理圓足した眞理の正體で、且つ正義の全貌であることは、心をしづめて其本典たる「天祖の神勅」と「神武天皇の建國皇謨」と、「明治天皇の勅教」と、「帝國憲法」とを反覆精思すれば、旭日の前の氷雪の如くすぐ解つて來る筈である。然し其も寂かに考へねば解らない。

(十二)

右傾左傾ともに邪曲であることは、中正の道から斷ずるところで、時代の變態作用としては、反動的に一時の効を爲す場合もないではない。然し其れは反動作用であつて決して常經ではない、常經でないから其思想それ自身が既に變動性をもつて居る、さういふものは萬代の範とはならない。日本の國體は天地の公道であると同時に、萬代の常經である。神意聖業を以て古今中外を貫いて、「天壤無窮」の大道となつて居るものに、一時性や反動的の貧弱さがある筈はない。常住は直ちに靜寂であり亦光明であること論を待たない。國體の正義を右傾思想などいふのは、類を知らないにも程があるものだ。王道坦々といふのは、不動不變を意味したもので、その根源が天理から出て居るから、人間手製の理窟や朝起夕廢の出來屋思想とは、全然撰を異にしたものぐらゐるは考へて置かぬと、國體の玄理はおろか、世の常の事物に對してさへも、まとも

の判断は下し得ないであらう。

(十三)

予まのあたり満洲の現地を踏みて、痛切に感じた事は、在留邦人の孜孜として満洲開發に盡しつゝある努力の甚だ大なるものある一事である。是れ吾が國の善隣高誼が致すところにして、亦出先官憲の精勵に依ること勿論なれども、その淵源全く明治天皇東洋開發の雄圖が事實に現れ來つて、その第一感應が満洲 皇帝陛下の深い理解鑿節に發し、満洲朝廷の百官が銳意王化に貢獻する所、内外節を合はし本支義を違へざる忠誠一貫の實を示すものとして、欣快措く能はざる次第であるが、その大綱に於て萬一にも正準を失うことあらば、百の施設千の畫策も俱に本義を失し、思はざる蹉跌を來すに至るであらう。此事は眞に一大事である。凡そ日本が満洲開發に就て一着手を誤るときは、日本の損害はいふに及ばず、百弊由て起り萬害此れに交絡して、東洋の治平定まる所なく、列強の藉口尋て起り、禍亂蟄集するに至らう。近く支那露西亞の口實を肥し、内匪外敵その隙に乗ずるの憂、相踵て來り迫るの虞れがある、考へれば容易ならざる事であるから、大事に大事を執らねばならぬ。

(十四)

満洲は大事だ、日本に取て特に重大責任がある。從來よく口にした權益の生命線といふ事、それも一事實ではあるが、實はそれ以上の大生命線がある。今日では權益を通り越して、一番大切な生命の根本線に及んで居る大事な時となつたのであるから、一意専心この要點に留意して、寂かに萬年の大策を此時此際確と把住せねばならぬ。それが前に言つた大綱である。モ一いよく其時節となつたのであるから、時を逸してはならぬ。時を逸するは事を誤るの前提であるから、此點最大の留意を要する。予は是までの満洲經綸を以て、大體に於て要を得たものと推賞する、が然し、それは準備構作であつて、正味の仕事ではない、正味は是からにある。それが「時」と「事」との場合を理會してかゝるべき重大點である。時とは何か、事とは何か、時とは日滿合意の事實的成立である。これは満洲國 皇帝陛下の御訪日と、その直後に表示された「精神一體」の詔勅の煥發のそれである。事とは此精神一體を如實に表現すべき經綸の大標準を確立する事の其である。而して予は斷乎として此標準を 明治天皇の聖旨を満洲全土に徹底普及する外にないと信ずる。

明治天皇は、日本の大興であり世界の指導者であると同時に、近く満洲國の爲めの直接師標たり直接救護者であらせられた。今上天皇はその御延長であることを深思し來れば、今回の満帝御訪日に於て、兩帝室の堅い御握手は取りも直さず明治天皇と師弟の御約束を爲されたものとして、意義甚だ深遠なものであると拜すべきであらう。兩帝室の交歡合節は即ち同時に兩國民の融合一體を意味して餘りがある。日本開闢以來、外國の天子が國謨合節の意味で來朝された事は、三千年來始めてである。満洲國に取りても、日本の現人神に接し、その交歡を厚くし且つ其民人の衷心敬仰を實見された事は、兩國交情の淵底を盡して領知せられた事と推知すべきは、その歸國の直後に煥發された大詔が之を證して餘りあるであらう。是れ即ち兩國交歡の一新紀元を劃したものでなくて何であらう。故に予はこれを「時」と斷じたのである。單に満帝の御來朝とか其御満足とかいふ通り一遍の意味ではない、これが日本對滿經綸の上に、又満洲自身開發の上に、始めて根本的標準の確立したといふ事が、天の時を得たものとしての「時」であるといふのである。

日本は勿論の事だが、別して満洲に在ては其が特別の意味で、明治天皇を忘れてはならぬ。明治天皇が最も御心血を注がせられ、又天皇の赤子幾十萬の血を流し骨を碎いた現實の大恩賚が、マザクと地に印し山野に刻されて居る此國土が、モハヤ只の山河でなくして、其儘現實に大道を刻印した靈的遺跡である以上、千載萬劫この道光徳恩に鞭撻されて、其光りを國土民生の上に再現すべく實行せざれば、満洲は單に忘恩の責のみならず、この貴き枯骨を侮辱したものと成つてしまふであらう。それよりも更に重大なるは、明治天皇洪大の慈恩雄圖を蹂躪することとなりて、冥加のほども恐ろしいことになる。故に満洲の大計は唯一つ、明治天皇の大經綸に蘇息して、治要を此一點に集注するに在る。任運の天籌は人間の考索よりも聰明で且つ確實だ。今回の満帝御訪日が此紀元を劃して、茲に満洲開展の眞規模は確立すべくなつた。サー是からだ、進路を確定するのは今がその時だ、時を逸してはならぬ、茲に満洲大經綸の根元が明かになつて、「日滿精神一體」の詔勅が降下したのは、時でなくて何である。此上は精神的經綸が何であるかを考ふる順となつて來た。

(十七)

精神一體といふ以上、その精神が果してどんなものであるかは、當然來るべき考察でなくてはなるまい。精神！むしろ精神的!! 滿洲の仕事はこの領解が根本である。政治も爾うだ、軍事も爾うだ、産業も爾うだ、教化教育は猶更の事、是からの滿洲經綸に於て、此精神の方針を逸したら、萬事は休すだ。早いところが産業の開發にしても、從來の様な、錢儲け主義の人間か何等國策的指導の洗禮も受けずに、滿洲へ往つたら道路に錢でも落ちて居るかの如く早合點して、あてどもなく無精神に渡來して、來て見ているが外れ、途方にくれたなどの類が可なり多い様であつた。そんな事ではいかぬ、無精神で來るものものだが、政府も一定の方針を立て、之を統制しないといふ事もない筈だが、何にしても不慣れのため確たる方途を立てる暇がなかつたのに、民の産業欲が秩序なく發展した結果であらう。然し、これは過去の事として致方がないが、一たび日滿精神契合の機運が成立した今日としては、よろづ此根本方針に遵ひ據らねばならぬ。その重要案件は三つある、第一に軍事だが、これは當局者の經驗と考案に信賴して、傍らから口を出す必要はないとおもふから、あとの第二産業と第三の教化

とに就き、予の所觀を披瀝して、主として日滿兩國の當事者に警告し、併せて吾同胞が負擔すべき國家經綸の最大關心事たる旨を述べようとおもふ。

(十八)

滿洲の事は滿洲だけで行ればいゝてはないかとか、縁あつて滿洲へ移住又は出稼ぎの爲渡滿在留して居る人たちの上の問題で、居残り日本人には無關係の事だなど考へる人がないとも謂へないが、これは、ほんでもない、景見違ひである。過去にも既に幾億の財を滿洲のために費やし、それよりも貴い吾同胞十萬の生命を滿洲のために捨てたのである、現在も將來もまだく、滿洲のために、直接間接にどの位の犠牲を拂はねばならぬか解らない。さりとて今更引込むわけにゆかぬ破目にもなつて居る、どころてなく、此經綸の一つで日本の將來は臧も否くもなるのである。滿洲經綸は即ち是れ日本經綸である、滿洲の榮えと共に日本も榮えるのである、この日滿共榮を大成すれば、其れて支那も露西亞も片付き、同時に世界も目がさめるのである。故に滿洲經綸といふ一事は、今のところ世界で一番大きい且つ意義深い、且つ極めて價値の高い問題なのである。是に於て予は先日畏くも滿洲 皇帝陛下に、最大急務としての二大經綸を進講

申上げたことである。

(十九)

世界の平和を建設する事が、日本の役目だとすると、其手始めが満洲の經綸である。即ち満洲は満洲だけの満洲でなく、世界平和の見本としての満洲である。こゝに於て満洲たるもの、進んでは世界の運命に關し、退いては日本建國の使命に係つて居る。これが經綸の重大なる事いふ迄もない。

そこで此重要經綸に於て、最大急務は二つとなる。其一は政治的經綸 其二は教化的經綸、此二つが經綸の樞軸である。政治的經綸に二つ、軍政と文政である。其中で軍政は事變以來、着々歩を進めて其趨向を誤らず、一に現當局の良斷に委せて信賴してよからう。文政また幸に其人を得て、現に事を慎み策を練りつゝあるは甚だ心強い。たゞ其最も急なるものは、消極的には民治であり、積極的には産業の開発である。産業の目標は先以て農政、林業、礦業の三を主なるものとし、總じて國營的機構による事勿論、其發動機關は満鐵是れが先驅をなすべき事いふを俟たず。満鐵の今後は一層重大となつて來て居る。

(二十)

満鐵は既に會社の組織なるが故、高處指導と大處裁斷の宜しきを得れば、國家的經綸たるに於て、最も其處を得たるものである。然るに従來の如く、政黨政治の好餌に供し來りたるは、外王化の開発を害し、内國政を腐敗せしめたる一大禍根たる點、舊滿軍閥の暴狀と兄弟分の秕政で、斷乎一掃すべき事、論を俟たない。今日漸次其根本革正を見んとしつゝあるは、國運興隆の吉兆として最も喜ぶべきである。尠なくとも土台がしつかりする迄は、何事でも個人經營及び利權あさりの徒輩の毒手に委せざる事が根本方針でなくてはならぬ。斯くて國力と共に民其慶に頼るやうに仕上げるのが王道經濟の骨目である。満鐵の當局、王道を魂とし、國運を身體として進むやう正しく指導するのが、今に於て満洲經綸の純王道政治である。王道政治といふものは、ピツタリ行けば、功利主義よりは確かで實益が豊かで、情味あり光明ある最善の政策なる事を忘れてはならぬ。これが政治經綸の尤も肝心要めな所である。

(二十一)

軍司令官たり駐滿大使たる當事者に南大將を得たるは、實に満洲經綸の幸である。近

時また松岡洋右君を滿鐵に迎ふる報に接し、又石原君參謀本部に移る。予一たび滿洲の實狀に接し、説くに王道を以てし、歸路朝鮮を経て深く滿鮮の使命を洞觀し、本朝國運の動き愈々徒爾ならざる事を曉り、益々日本國體の發揚、時到れるを確かめ得たる折も折、滿地經綸の機構始めて正準に歸せんとするは、全くこれ 明治天皇の徳光に照らされ 今上陛下の聖明による所、聯盟脱退の大見得が物をいふ場となつたもの、これで大向をうならせ、見巧者連の溜飲を下げさせる事となつた。予が 滿洲皇帝陛下に國體の要道を言上し、各地に明治聖訓を宣揚したる事も、徒勞に歸せざる事となつた。天なり、時なり、運なり、眞理の楔、正義のネヂがきいたものとして、此點は安心が出来る。

「文武の政、布いて方策にあり」と古人は言つたが、予は應に「文武の政は懸つて國體に在り」といふべきものと斷言して置く。

(二十二)

政治的經綸は、予むしる局外者でたゞ道から其大綱を指示したものに過ぎないが、要點には些の間違はないと信ずる。以て局に當るもの、参考に資した迄の事。次に大に語

らんとする所は、二大經綸中の残された他の一つ、即ち教化經綸の一大事である、即ち精神的開發のそれである。宗教、教育、及び諸の教化事業並びに藝術的施設、いづれも精神的指導ならざるはないが、これが若し個々別々無統制無方針であつては、民心の趨歸に於て支離滅裂、左顧右眄、終に適從する所を失つて、やればやる程世の紛亂を來し、民心の昏惑を長じ、紛雜葛藤の因となる懼れがある、故によるづ。白紙状態にある滿洲に在つては、其始めが大切である、日本が「明六社」時代から、かの「鹿鳴館」時代の馬鹿々々しき歐化主義に害せられ、其反動として盲目的な國粹主義、脱線した無政府主義など、トテツ途方もない戸惑ひから、最近問題になつた機關説の如き覆轍をふまざるやう最初の振出しが肝要である。

(二十三)

滿洲の開發は、實に日本の精神運動に對する試金石である。「精神的生命線」と予が叫ぶのは此點である。先日南大使に面談した時も、大使は「是からの滿洲は精神的開發の時代である」と言はれたが、局に當る重任ある人の言として、げにもと首肯されるものがあつた。眞に其事である、折から予は精神運動の猛進出を滿洲に開始すべく、病

老半癡の身を鼓して、明治天皇御神靈の御稜威の下に、王道立國の當事者たる滿洲に、王道の本義が日本國體である事を力説して、全滿を擧て明治天皇化すべき趣を強調したのは、全くこの精神的開發の大標準を示さう爲めであつた。

釋尊が慈悲を説き、孔子が仁を談じ、基督が愛を説いた、それは都て理談であり思想であり言教であつて、實物の展開ではなかつた。故に其教への盛んなる時は其道が行はれたが、時代の推移や人心の變更で、明滅常なくて一定の「力」を常設することがないから、理あつて實なく、聲あつて形なく、精神は精神限りの空函に封じ込れてお終ひになつて居ては、人類の爲に遺憾此上なしである。

(二十四)

精神の事は精神だけで、物質にも事實にも没交渉だと考へたのは、未顯眞實の談で、眞の精神解釋ではない。精神が物に通ずるのでなければ、精神の力は落第である。佛教に「神通力」といふのは、「心の力」が物に透徹することを言ふので、故に又「神變」とも言はれて居るのである。日本國體の精神運動は、即ち此「物心一如」の點に重きを置くのである。滿洲の經綸が此後専ら精神運動に重點を置くとならば、何よりも先きに精神の歸着點を確定するのが最も大切である。而して予は斷乎として

「明治天皇に聚らしめよ」

と叫ぶものである。滿洲の明治天皇に於けるや、重々の因縁と心迹との特に篤いものがあることを、第一に念頭に置かねばならぬ。又これが尤も適切な且つ親密な目前の顯理現證であつて、ムダな手数をかけずに、スラ／＼と彼地の人にも合點され易く、心の奥に浸透し易い實踐的宗教味のある教化法として、事理相應した世界無前の大教化方法であることを痛言して憚らざるものである。

(二十五)

明治天皇は滿洲建國の大恩神でまします事は、何人も異論のない所である。即ち予は先づ斯に明治天皇が滿洲に取りて退引ならぬ因縁と道理が存し、而かも其れが日本建國の約束でもあり、又建國使命の時的發展でもあることの、二大理由と五大因縁を主張するものである。

(1) 世界平和建設の發軔

世界は精神的に一つになる必要がある。その爲めの日本國體で、其れを遂行する

のが日本の使命である。其段階は先づ東洋平和から肇まる、其東洋平和建設が、即ち滿洲扶護である。

(2) 東洋平和の發祥地滿洲

朝鮮半島の接壤地としての滿洲は、正に東洋泰和の關門なるが故に、王道正義日本國體の移植地として、別して滿洲を扶護するの要がある。

從來國際聯盟相場で、權益の生命線とばかり、自他共に其れで堪能して居た事だが、今や其んな淺近な理由では通らない。權益以上の重大事は、何あらう唯是れ「世界大」「人類大」「宇宙大」の表相場たる精神問題でなくてはならぬ、即ち「精神的生命線」と骨張する所以である。

(二十六)

次に滿洲が有つ 明治天皇の直接大因縁が左の五である。即ち

(1) 世の愚痴を對治する日清戰役

世界列國殊に支那軍閥の盲目的な矯暴を懲した二十七八年戰役の御慈折

(2) 世の貪慾を對治せる日露戰役

次に暴露の貪婪飽なき野望を膺懲せる三十七八年役に於て、完全に三國の惡干涉に鼻をあかしめ、東洋攪亂の魔手を驅逐して、今日の滿洲平安境を現出したまへる世界空前の御慈折

(3) 世の瞋恚を對治する皇軍の世界戰役

怨嫉瞋恚の結晶たる「三國干涉」を清算せるは、世界大戰の參加青嶋役である。

(4) 聖血靈骨の山河滿洲

二大戰役に、天皇の赤子が「流した血」と「碎いた骨」は、今猶滿洲の山河に印せられて、永遠に 明治天皇の慈恩に彩られて、河水草木俱に聖徳を頌しつゝある。

(5) 夥多の心勞財力王道國を生む

洪大なる 叡念、莫大なる國財、悉く平和建設の基礎ならざるはない。今の滿洲國は、此大力作に依て築上げられた精神的產物である、即ち 明治天皇の下したまへる世界平和の大資本である。

(二十七)

以上の「二大理由」と「五大因縁」とが、滿洲の 明治天皇に負ひ奉れる精神的債質

である。故に滿洲國としては、その開發の啓端に當り、先以て此切つても切れぬ「大理由」「大因縁」に立脚して、その精神開發の方針が、必ずこのヒントを外すことなく、ヒタ進みに進むべきではないか。こんな合理的な自然的な、且つ切實有効な精神的標準は、斷乎として他に見出し得ないであらう。即ち滿洲としては特にこの因縁篤き。明治天皇に聚るのが、「力」としても大きく、「事業」としても早手廻はしである。明治天皇を仰いで滿洲の。天照大神とすべく、現滿洲 皇帝陛下を以て滿洲國の神武天皇と爲すべく、上下心を齊しくして經綸すべしとは、予が滿洲に於て朝野に力説した所で、幸ひに各地とも 天祖皇太神及び 明治天皇の二柱を賽き祀れる神社が鎮座あるのは尤もよろしい。願くは之を各都邑聚落に普及するがい、猶今一步を進めて、新京又は其他に、勅建を以て 明治天皇一柱の外に 皇帝陛下の御先祖一柱と、文宣王孔子一柱とを配祀し奉り、之を滿洲國の大宗廟として、舉國崇信の的とすればとおもふのである。

(二十八)

滿洲に拂つた犠牲の大なることを説くものはいくらもあるが、それが大なる精神的貢獻であつたことを餘り言はないのは、自らを小にし且つ卑くする所以で、霸道心理の窠臼を脱し得ざるものである。明治天皇の注がせたまへる慈恩は、むしろ精神的大恩費であつて、永久無限の生命力が、特に此點に存することを知らねばならぬ。然らば、今滿洲新經綸の大眼目とされつゝある精神的開發の進路も、先以て此レールに乗らなければ嘘だ。いかに精神運動と言つたとて、複雑無統制な宗教教化を是れ事とし、片々たる「淫祠と皮一枚」の宗教類似の倫理宣傳や、神秘怪奇の氣休めの姑息安心などの運動を、斷片的又は割據的に、どれほど力を盡しても、大統制あり大威力あり大理由ある所の、精神集中方針を確立しなければ、教化紛雜の爲めに却て心緒を混亂し、或は事端を滋くする虞れなしとも謂はれない、何事も始めが大事だ、殊によりづ白紙状態に在る滿洲としては、猶の事慎み且つ稽ふべき所であらう。

(二十九)

明治天皇が、既に精神的に滿洲を啓發し孚護したまふのに對し、滿洲國の民心開發に資すべき、唯一の教化經綸として、宜しく 明治天皇を精神的目標とし、その隆化を擴大普及することは、魚心の水心に於けるが如く、冠蓋相應した此上もない精神運

動でなくてはなるまい。

聞く所に據れば、滿洲には「協和會」なるものがあつて、年々巨額の國貨を投じて、上下の融會を計りつゝあるといふ事だ、農事人件等社會的施設にも參じて、成績を擧げて居る趣尤もよろしい。願くは此種の精神的（若くは半精神的）の諸團體に於て、その精神統攝の中心を、明治天皇崇信の一事に置き、諸般の經營設備をして、この大精神下に攝理統率せしむべくありたいとおもふ。

明治天皇を崇敬する情操を養うには、先以て世界平和の大理想が、天皇の宗旨なることを訓へ、別して東洋平和の事實着手としての滿洲大樂土の建設に於ける大理想を示し、及ぼして政治文教倫理社交の一切に亘る教訓として、「勅教」はじめ「神詠」の數々聖旨に就て教へることが最も捷徑である。

(三十)

いづれ滿洲帝國も、早晚「憲法」を御制定なさる事であらう。無論 明治天皇の欽定あらせられた主旨原則に法り、王道の大本滿洲國體の皇基を主眼とし、權利義務級の政要は國憲大法の屬性として、煩雜に失せざる様、憲法學者とか法理論とかの邪魔物

が入込み得ざる様、皇帝陛下の御持論と拜承する所謂「東方道德」の骨目を主張遊ばす様、外臣智學も神かけて念じ奉る所である。又道德元典として 皇帝御直授の教訓は、宜しく國民指導の本典たるべく、明治天皇の勅教（世にいふ教育勅語）に則しを採り、陛下のおことばとして、中に「明治勅教」を御引用遊ばす様あらば、恐らく一舉兩得の明訓、世界列國も亦これに倣ひ奉るべく、喟然として世界王道化の目標となるものと、恐れながら確信し奉る次第である。

明治天皇を精神の目安とし、教への主體とすることは、現代に在て（別して滿洲國に在ては）情理明白何人も異存を言ひ得ざる所にして、リットンを曉覺せしめ、ウィルソン及びレーニンをも地下に瞑目せしむるに足るほどの大合理的教化經綸であつて、是れ即ち目前の急務、脚下の緊要事であることを力限り勸勉して置く。

(三十一)

一體この「精神的生命線」といふことは、予が、六月上旬、渡滿の初めから書き起めて、在滿中も日々に筆を呵し、七月二十八日歸朝まで、毎日一二節づゝを筆して、「大日本」讀者を通じて、汎く江湖に表白した所で、所詮は今回の渡滿に縁して、予の滿洲觀を

實驗上にも反影させて、痛切なる所感の已み難き節々を、大まかに開展したものであるが、**精神的生命線**の語は、實に論旨の中心であつて、同時に實際施設の要條と信じられたから、**滿洲經綸**の大切な事を日滿兩國の要人に議するため、特に此命題を擇びて、關係者各位の篤き留意を促さうと思つて、歸朝後これを略訂して再刊に附した次第で、約めて曰へば、**精神的生命線**とは、「**滿洲は日本の精神的生命線**」だといふことであるが、同時に亦**滿洲の生命線**であり、**世界の生命線**でもある。

即ち「**滿洲を先づ精神的に見よ**」と言ふことに歸するのである。由來利權本位で「何か儲け仕事はないか」とばかり、利欲一點張で**滿洲**を見たのが、既に甚だしい顛倒だといふのである。儲けるのも悪くはない、然しそれは先づ正當に儲かる様にして置てからの事である。王道を養育して正しい**民利國富**を獲得するのが、取り分け日本人の面目でなくてはならぬ。移民も出稼者もあらゆる在**滿邦人**は、その一擧手一投足も咸く**明治天皇の御精神**を自己の精神として、**滿洲大靈地**を莊嚴する心構へでなければならぬ。若し此大精神を無視して、只錢儲けのみを第一義とするならば、是れ晰かに**明治天皇の大地**を汚し奉るもの、亦これ幾十萬戰歿將士の**枯骨**を踏附けたものとして、必ず罰があたる必ず！。(完)

昭和十年十月七日印刷
昭和十年十月十日發行

〔精神的生命線〕
〔非賣品〕

不許
複製

著作者 田中巴之助
發行者 東京市江戸川区一之江町 師子王文庫
代表 田中好一
印刷者 東京市下谷區上野德木町一番地 遠山三男
印刷所 天業民報社印刷部

發行所

東京市江戸川区一之江町

師子王文庫

電話東京六六七番

終

